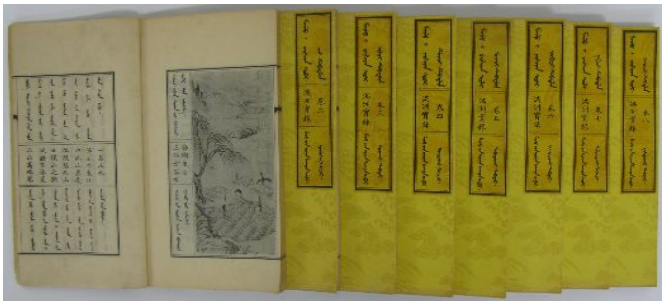
『満洲実録』におけるモンゴル語の言語学的研究

Study of Mongolian Language of the *Man-chou shih-lu*（『満洲實録』）

環境科学研究科内陸アジア地域論　**オヨンガ**（Uyungga）



『満洲實録』八巻
旧奉天故宮崇謨
閣所蔵本（日満
文化協会影印本）

〇研究目的

・本研究は，『満洲実録』におけるモンゴル語の正書法，語彙，および文法的語尾の種類と用法を調査して，『満洲実録』のモンゴル語の特徴を明らかにしようとするものである。

〇研究の背景

・満洲族の発展

→元来中国興安嶺東部，松花江・烏蘇里江流域の山川地帯で狩猟生活を送っていた。

→16 世紀末，建州女直のヌルハチは兵を起し，1616 年にアイシン国（後金国）を建国。1636 年，ホンタイジは女直を満洲と改名し，清朝皇帝として即位。1644 年には清朝軍が入関し，旧明朝の領土をほぼ統一。

→ヌルハチ時代以前から，建州女直はモンゴル語を使用していた。1599 年，モンゴル文字によって満洲語を表記することにした。17 世紀初期に，アイシン国はモンゴル諸部とモンゴル語を利用して外交関係を維持していた。この時期から始まる満洲・モンゴル・漢の 3 言語を併記して利用する伝統は，1911 年に清朝が滅亡するまで続く。

→1636（崇徳元）年，ヌルハチの生涯を記した『太祖太后実録』が，満洲語・モンゴル語・漢語の 3 言語で編纂。1781（乾隆 46）年，『太祖太后実録』に『太祖実録戦図』の挿図を書き加えて『満洲実録』を作成。

〇研究対象：

・現存の『満洲実録』には，旧北京故宮本（中国第一歴史档案館所蔵）・旧奉天故宮本（沈陽故宮博物館所蔵）・旧熱河離宮本（河北省熱河避暑山荘所蔵）などがある。

→本研究では，旧奉天故宮崇謨閣所蔵本の影印本（日満文化協会出版）を底本とする。

・『満洲実録』は，主に 1583 年～1626 年までのアイシン国内外の動向，ヌルハチが女直各部を統合し，明を侵攻して，モンゴル諸部との往来内容を記載したもの。現存の『満洲実録』は，全 8 巻 8 冊。頁面を上下で 3 段に分けて，上より満洲語・漢語・モンゴル語の順に配置し、挿図を説明。87 面 162 頁の挿図がある。

〇研究方法

①『満洲実録』のモンゴル語をローマ字転写する。ローマ字転写は，本研究の基礎的な作業であるが，それによって，モンゴル語の解釈を行い，同時に索引の作成，検索，抽出などの作業に利用することができる。

②文法的語尾の種類と意味を整理する。主に名詞の格語尾・再帰所属語尾・複数語尾の種類と意味・用法。さらに，動詞の時制形・命令願望形・形動詞形・副動詞形語尾の種類と用法を明らかにする。

③語彙の特徴を検討する。とりわけ，現代モンゴル語では確認できない単語，意味的には現代モンゴル文語と異なる単語，意味不明な単語を調べる。